

## 稲 作

## 「北海道 稲作に挑戦する人々」その6

旭川市東旭川町旭正 石坂 寿浩 氏

## 1. はじめに

JAグループ北海道は全道での農業生産工程管理（GAP）の推進に関する当面の取り組みとして、30～32年度の3力年で、農林水産省のガイドライン水準のGAPの実践を目指すこととしている。

また、GAPを推進する目的についても、東京オリンピック・パラリンピックの開催に関わらず、食の安全・安心や生産者らの労働安全の課題といった「内部環境」や、一部実需によるGAPの取引条件化、国の一部事業におけるGAPの要件化を確認するとともに、さらに目標達成のためにも「一定水準以上のGAPを連合会やJAが足並みをそろえて取り組むことが必要」としている。

このように、ここ数年の農業を取り巻く情勢の変化は激しく、GAPについての話題に触れる機会も増えたが、今回はJGAPの積極的な取り組みを実践しているJAあさひかわ特別栽培米部会において、会長として部会をけん引している石坂寿浩氏にお話を伺った。

## 2. 地域の特徴

旭川市は、四方を大雪山や北見山地などの山々に囲まれた盆地で、春から夏にかけて温暖であることから稲作に適した気象条件であ

り（図1、図2）、大雪山を源流とする石狩川や忠別川等の水に恵まれている。JAあさひかわが管轄する地域は、旭川市に位置する旭正、永山、神居、神楽地区と、鷹栖町に位置する北野地区と広範囲であり、土壌タイプは多種多様である。旭正、永山地区は、忠別川と石狩川に挟まれた場所に位置し、暗色表層褐色低地土が多く透排水性が良好である。神居、神楽地区は、褐色低地土が多く排水性良好。北野地区はグライ土や泥炭土が多く排水性はやや不良な圃場が多い。また近年、基盤整備事業により、水田の大区画化が進んでいる。



写真1 特別栽培米部会役員

(左から笠井副会長、石坂会長、石坂副会長)

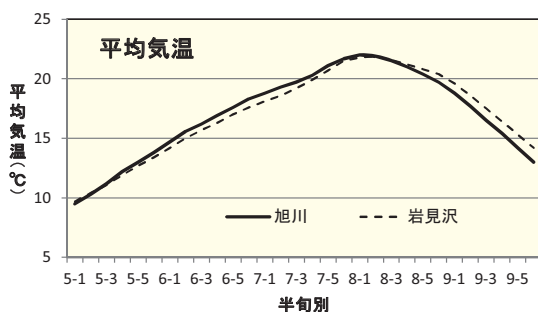


図1 平均気温（平年値）の推移

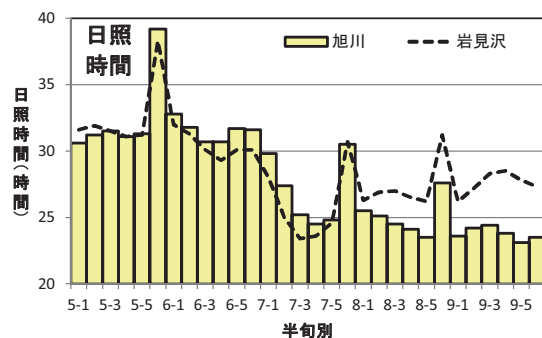


図2 日照時（平年値）の推移

### 3. 稲作の経歴と経営概要

#### (1) 稲作の経歴

稲作の歴史は上川管内で最も古く、明治24年に神居村、永山村で試作が始まるなど「米どころ上川」を代表する道内でも有数の米の主産地である。平成28年の旭川市における水稲作付面積は、6,290haで市町村別では、岩見沢市の6,660haに次ぐ道内2番目の面積となっている。

「JAあさひかわ」は平成10～14年の農協合併により誕生した広域農協で、旭川市の旭正地区・永山地区・中央地区・神居地区、鷹栖町の北野地区からなり、経営形態は、①水稲+転作畑作（小麦、大豆）、②水稲+野菜、③施設野菜が中心であるが、花き、畜産、果樹等もあり、多種多様な農業が展開されている。農協内における稲作関連の部会組織として「JAあさひかわ稲作連絡協議会」、「JAあさひかわ特別栽培米部会」、「JAあさひかわ酒米部会」、「あさひかわ直播研究会」があり、

活発に活動している。

JAあさひかわ特別栽培米部会は、安全・安心な米作りと米の付加価値向上を目指す農家が集まり平成24年に設立された。設立当初から「ゆめぴりか」の減農薬栽培（6成分以内）に取り組み、他産地と差別化した米生産を行っている。

#### (2) 経営概要

石坂家は、大正8年に富山県から入植し、現在の寿浩氏は5代目である。寿浩氏は短大卒業後10年間の農業機械の会社勤務を経て、2001年から経営を引き継いだ。

現在、水田46.4haおよび畑22.9haで畑作物の内訳は、小麦11.3ha、大豆9.3ha、そば2.3haである（図3）。

水田は移植栽培が中心で、複数品種を作付けしており、平成20～29年は直播栽培にも取り組んだ。平成30年からはハウスを増設し、移植栽培のみとなっている。従事者は、本人、妻、父、母および他1名の合計5名で、父親

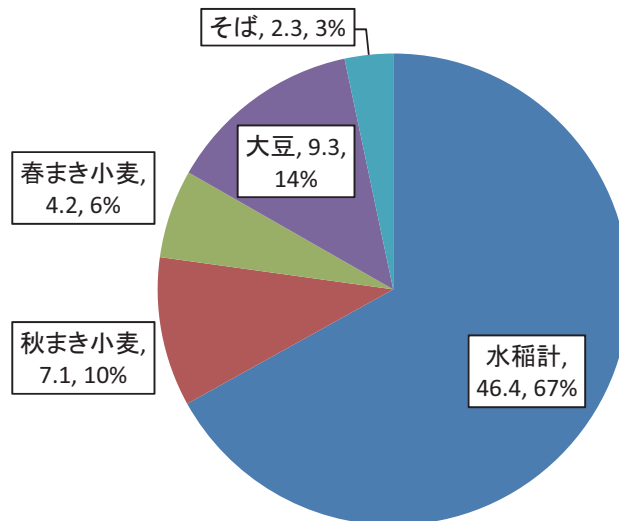


図3 品目別作付割合



写真2 春先の石坂農場の育苗ハウス群

は水田の水管理、妻と母は育苗管理などを担当している。

## 4. 稲作技術の特徴

### (1) 透排水性の改善と圃場の均平

石坂農場の土壌条件は圃場の多くが礫質褐色低地土で排水良好だが、グライ土もわずかにある。透排水性の改善のために溝切り、秋起こしは毎年やっており、わらは秋すき込みである。

また、圃場の均平化により、水管理が非常に楽になるため、毎年 8 ha 程度にレーザーレベラー施工を行っており、特に、新たに取得した水田等には必ず実施している。

### (2) 育苗と移植

育苗ハウスは10棟あり、苗は成苗ポットである。5年前から置床鎮圧法を導入しており、乗用型および手押しの鎮圧ローラーをリースして、全体を乗用型で、縁の部分は手押しのローラーで鎮圧している。鎮圧後、灌水機用のレールおよび根切りネットを設置して、育苗ポット設置の前日に4時間灌水する。

播種は1日1棟のペースで行い、毎日1棟ずつ完了させ、播種作業を休む日は設けていない。これは、移植機1台で1日にハウス1棟分の苗を約4haに移植できる作業性を実現しているためで、移植作業は10日間で終了する。平成28年から移植機にGPSガイダンス等の自動操舵補助システムを導入しており、

平成29年にはシステムの精度がさらに改善された。

また、苗取りのパート人員を延6～7名必要とすることと、苗の運搬には軽トラックよりも一度に多量の苗が運べるように、トラクターのバックレーキを利用した運搬ユニットを作っている。

### (3) 作付品種と栽培仕分け

作付け品種と作付け割合を図4に示した。また、品種毎の栽培法仕分けを表1に示した。

主要品種の作付け割合は、「ななつぼし」が38%、「きらら397」が20%、「彩」が23%、「ゆめぴりか」が10%である。栽培法は一般米（Yesクリーン含む）、特別栽培米（特栽培米）および有機JAS栽培米（有機JAS栽培）である。

### (4) 施肥等

施肥量は標準施肥量で窒素成分で9kg/10a程度で、うち側条施肥を40%程度としている。また、「ゆめぴりか」には幼穂形成期後のケイ酸追肥に「ゆめシリカ」を施用している。特栽培米は発酵鶏糞を用い、有機JAS栽培では認証された有機肥料を使用している。

### (5) 水管理・病害虫防除等

基本技術を的確に実践して、適正な水管理に努めるとともに、病害虫防除については発生対応型防除を基本に、JAからの情報に従って防除している。有機JAS栽培（14ha）は防除しないことや、特栽培米は防除時期

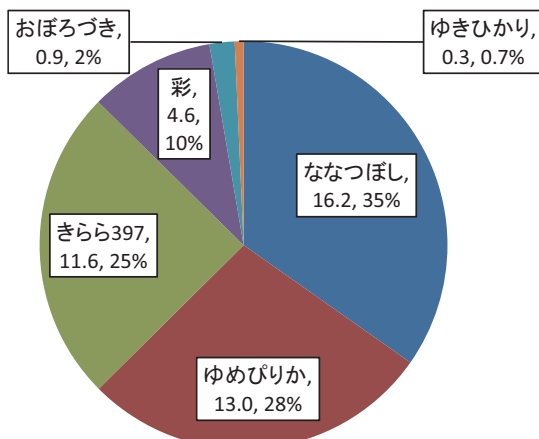


図4 水稲品種別作付割合

表1 品種別の栽培法

品 種 名	一般米 (含Yesクリーン)	特別栽培米	有機JAS 栽培米
ななつぼし	○		○
ゆめぴりか		○	○
ゆきひかり		○	
おぼろづき		○	
彩		○	
きらら397	○		

がずれるなど、防除が集中する圃場は20～30ha程度で、ピークル2台を使い、1.5日ほどの確に防除できている。

**(6) 高品質米生産、その他**

JAあさひかわでは品種特性に合わせた米生産をしており、「ゆめぴりか」は低タンパク米生産を目指している。ホクレン支所別の低タンパク米の集荷率では、上川地区は必ずしも高くないのが現状である(図5)が、石坂農場の平成29年産「ゆめぴりか」は全量タンパク質含有率6.8%以下であった。

収量は「ななつぼし」で11俵/10a程度、「ゆめぴりか」の特裁は9俵程度、有機JAS栽培は9.5～10俵/10a程度である。



写真3 特別栽培米「ゆめぴりか」とエスクリーン米「ななつぼし」

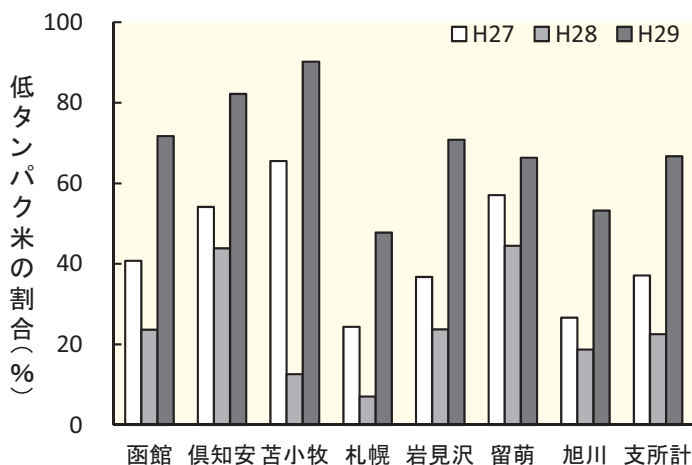


図5 ホクレン支所別の低蛋白米集荷率

**5. 安全・安心を求めて**

**(1) 有機JAS栽培米**

有機JAS栽培では除草剤が使えないため、除草機による物理的除草作業を行っている。畑作用の除草機を基本に、機械メーカーの協力を得て、5年間試行錯誤を繰り返して現行のモデルにたどり着いた。また、移植後に米ぬかを水田に撒き発酵させて、雑草をコントロールしている。

さらに、有機JASでは融雪材に牛糞堆肥を用いている。堆肥は愛別町の畜産農家から入手するが、トラック60～70台分を自分で運んでくる。

**(2) GAPの取り組み**

農場の規模拡大に伴って面積や従事者が増えると、整理整頓を含めた農場管理が難しくなってくる。GAPの取り組みで先行している農場では、整理整頓がスムーズになったようであり、石坂農場でも普段の農作業をスムーズに行えるようにとの考えで、JGAP認証を取得した。

最近では、2020年の東京オリンピック選手村への食材供給に端を発して、GAPの認証取得について申請者が増えているようであるが、GAPの基本理念は円滑な農場管理であり、有利販売に直結した制度ではないので、ここをはき違えないことが重要である。東京



写真4 除草機をかける石坂氏



オリンピック後も認証取得の動きが続けば本物と考えられ、国産農産物の今後の競争力向上にも役立つと考えられる。

## 6. 今後の問題点

旭正地区は40才台前後の経営者とその親(70才台)による経営が多いため、後継者の育成が喫緊の課題で、経験の浅い農業従事者に対する水田特有の代かきや機械操作などの技術指導および経営指導等が重要と考えている。

これらの課題解決のためには、まず円滑な農場管理が基本になると考えて、JGAPの認証を取得した。また、現在は法人化していないが、将来は法人化を視野に入れて、法人化の中で後継者の育成を考えて行くつもりである。

## 7. 農業改良普及センターの意見

石坂さんは水稲46ha、畑作23haを作付けされ、大規模面積を個人で経営されている。JAあさひかわ管内でもいち早く置き床鎮圧育苗やGPS自動操舵田植機を導入するなど、省力化技術に積極的に取り組んでいる。一方、有機JAS栽培などでは、手間暇を惜しまない圃場管理により、品質の高い米の生産に努めている。また、普及センターの実証展示圃の設置にいつも協力頂いている。

特別栽培米部会では設立当初より会長を努め、「JAあさひかわ特栽培米のかお」として部会を牽引してきた。今では、JAあさひかわのトップブランドとなった特別栽培米「ゆめぴりか」であるが、さらに、部会ではJGAP



写真5 特別栽培米部会夏季研修会

(前列左から3番目 石坂会長)

認証の取得を推進しており、いっそうの安全・安心につながる農場管理に取り組んでいる。

常に先を見据えて活動されている石坂さん、今後のさらなる発展が期待される。

### ●石坂氏のコメント

消費者のニーズに合った農産物を生産してゆく農業が、当たり前と考えており、厳しい農業環境の中で生き残るために、今後必要とされるものは何かを熟慮して有機JAS栽培を10年以上やってきた。高価格のため首都圏の富裕層に購入いただいているようだが、道内スーパーでも置いていただいている。

これからも、有利販売を視野に入れつつ、特栽培米、有機JAS栽培など、差別化できるこだわりと、安全・安心の米づくりを目指してゆきたい。

(文責 一般社団法人 北海道米麦改良協会 技監 相川宗厳)